

06・夜明け前にはふたつの月

〈シチュエーション〉

本編トラック05の翌日。

三月三十一日（日）十時半ごろ。

結月が治療を受けていた、花宮大学病院内の待合スペース。

本編トラック05終了後、結月の治療は成功。

主人公と結月は、無事に現実世界に帰還した。

しかし主人公が目覚めた時、ルナの姿はもうなかった。

そこで主人公は翌日、念のためもう一度検査する事になった結月とともに花宮大学病院に出向き、ルナの所在について尋ねる事にする。

それから、なぜか病院側から修理の申し出を受けたスマートフォンを取りに行く。

主人公の用事が終了後、結月と合流するところからスタート。

結月とルナが両方登場する唯一のトラック。

場所移動はほぼなし。待合スペース周辺を移動する程度。

SE1 待合スペースの環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【トラック終了まで流し続ける】

【0—8秒ほど流してSE2】

SE2 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

【次の『結月』のセリフに対して長さが足りない場合、2回繰り返して流す】

【▲1 で段階速度が速くなる】

★ボイス加工あり

・10メートルほど離れた距離から聞こえる

・だんだん近づいてくる

●正面 30センチ

■主人公の存在に気づき、明るく呼びかける。

結月は先に検診を終え、待合スペースで待っていたので

「『あれっ？ もしかして気づいてない？ 私はここよ！』という感じで」

おー……いい！

こっち、こっち〜！」

〈主人公〉

「ゆづ！」

▲ 1 ここでSE2の速度が一段階早くなる

★ボイス加工あり

・5メートルほど離れた距離から聞こえる
・だんだん近づいてきて、1メートル地点で止まる

●正面 30センチ

■駆け寄ってきた主人公と、立った状態で向き合って会話を始める

「【明るく嬉しそうに。『ああよかった、気づいてくれたわ』という感じで】
お疲れ様！」

〈主人公〉

「遅れてごめん！」

★ボイス加工あり

・1メートルほど離れた距離から聞こえる

●正面 30センチ

「【穏やかに落ち着いて。

だが上機嫌という感じで。主人公に会えて嬉しいので」

ううん？ 遅れてないわよ？

私がいふ早く終わっただけよ。

【おずおずと尋ねる。破損した主人公のスマートフォンを、なぜかこの病院で直すという奇妙な事が、本日起きているので。

『大丈夫？ 本当に直った？』という感じで」

……どう？ スマホ直った？」

〈主人公〉

「うん。おかげさまでこの通り」

★ボイス加工あり

・ずっと近づき、正面30センチの距離になる

●正面 30センチ

■主人公に、電源が入った修理済みのスマホを見せてもらいながら
「明るくホッとした様子で。『ほんとに直ってる！』という感じで」
よかった！ 完全に元通りね」

〈主人公〉

「そっちはどうだった？ 検査」

●正面 30センチ

「明るく嬉しそうに。」

『ああ、私、そういえば病気だったわね』と、今思い出したような感じで
私？ お陰様ですっかりいいわ。

「ちよつとかわいく、コミカルに。」

『あんな……あんな病氣』をちよつと忌々しそうに。

完治したからいいものの、例の病には散々な目に遭わされたので」

あんな……あんな病氣、最初からなかったみたいに元気。

ところで、この病院って、スマホまで直してくれるのねえ。

おまけに、タダだったんでしょ？」

〈主人公〉

「……うん。直せるみたい。

私もその辺よくわかんないんだけど、まあ、タダだったからやってもらおうかなって」

● 正面 30センチ

「『よくわからないけど、まあ、直ったならいいわ』という感じになるほどねえ。

【もっと重要な事があったのを思い出して。

『こちらの方がずっと重要な問題だった』という感じで。

主人公は今、スマートフォンを受け取るほかに、治療用AIが現在どうしているのかを危機に言っていたので」

そうだ、AIの話の方は聞けた？

私の治療中、貴方が少しでも有利に動けるように手伝ってくれてたっていう」

〈主人公〉

「……うん。そっちは駄目だった。

治療用AIは患者のプライバシー保護のために、治療が済み次第データ削除しちゃう決まりなんだって」

● 正面 30センチ

■ 主人公が気落ちしてはいないか、心配でならない。主人公はとても治療用AIの事を気にかけていたので

「【ものすごく残念そうに、また、心配そうに。

慎重に言葉を選びながら、主人公を励まそうとする。

一行ごとに少し間があく感じで」

あら……。

そうなの……。残念ね。

貴方、私の治療用AIの事、とても気にしてたものね。

【特にものすごく心配そうに】

どうか気を落とさないでね？」

〈主人公〉

「……うん。

AIだっていうのはわかってるんだけど、AIとは思えない程愛着がわいちゃってて」

● 正面 30センチ

「【ものすごく残念そうに、また、心配そうに。

慎重に言葉を選びながら、主人公を励まそうとする。

「一行ごとに少し間があく感じで」

本当に残念ね。

私としても、彼女は恩人のようなものだし。

お話ができたらって思ってたんだけど……。

あれって、治療完了とともにデータ削除されちゃうものなのね。

元氣、出してね？」

〈主人公〉

「ありがと。まあ、最低限どうなったかって事だけでもわかってよかった。

スマホも直ったしね」

● 正面 30センチ

「【優しく気遣うように】

……そっか。

【明るく話題を切り替える。

結月としてはもう少しこの話をしていたかったが、主人公がそうしてほしそうなので】

まあ確かに、スマホの件が解決してよかったわよね！

【明るくしつつも、申し訳なさそうに。

結月は主人公のスマホ破損に責任を感じているので】
私のせいで、壊れたようなものだものね」

〈主人公〉

「……あ。またさあ、そうやって自分のせいにする。
私がドジって壊したただけだからね？」

● 正面 30センチ

「【明るくしつつも、ちょっと申し訳なさそうに。

結月は主人公のスマホ破損に責任を感じているので】
そうは言われても、責任感じちゃうわよ。

貴方、このスマホ。

転んだお年寄り庇って壊したんですって？

……あの日、来る途中に」

〈主人公〉

「あー。その情報……お母さんからか？」

●正面 30センチ

「『ちよつとばつが悪そうに。主人公がいかにも『知られなくなかった』という顔をしているので。

一行ごとに少し間があく感じで」

……あー……。

うん。

貴方のお母さんから聞いた」

〈主人公〉

「なぜ我が母は余計な情報をゆづに教えるのか……」

●正面 30センチ

「『かわいく怒りつつ、この件について教えてくれた主人公の母親をかばう。それから、スマホの破損状態について述べる』

もう。余計な事なんかじゃないわよ。

でもお母さんの事、怒らないでね？

貴方、絶対自分からは言わないだろうって思ったから、私が無理に聞き出したの。

貴方のスマホ、酷い事になってたんでしょ。

……連絡できないのも当たり前よね。

言い訳、すればよかったのに」

〈主人公〉

「しないよ。かつこ悪いもん」

●正面 30センチ

「【かわいく呆れた感じで】

全く……。」

■事件当日の主人公の動きを、結月なりに推測して話す

ていうか貴方、あの日はまずお年寄りを見送って一回病院に行って。

その後今度は私の搬送でもう一回行っちゃって事よね？

大変な一日だったわよね。

そりゃあ遅刻するよね。途中で諦めたってよかったのに……。」

〈主人公〉

「約束を守るのは当たり前でしょ？

みめいちゃんに二言はないんでね」

● 正面 30センチ

「かわいく、ちょっと呆れた感じで。

主人公の発言を、ちょっとオーバーに復唱する。

『この人一体、何言ってるの〜?』という感じで」

『約束は守る?』『私に二言はない』い〜?

【※息遣いのみ※】で表現する。

かわいく、大げさにため息をつく】

はああ……。

貴方、そういうとこ、絶対曲げないんだから。

【ぼそと。

『私はまあ、貴方のそういう所も好きだけどね』という意味で言っている……まあ、そういうの、私は『いいな』って思ってるけど……」

〈主人公〉

「うむ」

●正面 30センチ

「ちよっともじもじしつつ、話題を切り替える」
じゃあここで、私から一つお知らせなんだけど」

〈主人公〉

「ん？」

SE3 結月がプレゼントを取り出す音

「最初から最後まで流す」

「次の『結月』のセリフと重ねて流す」

●正面 30センチ

「明るく、少しでも主人公を元気づけようと」

実はね。今回のせめてのお礼……って訳でもないけど。
貴方にプレゼントがあるの。

AIさんの代わりにはなれないけど……。

良かったら使ってほしいなって」

〈主人公〉

「えっ。嬉しい。何くれんの？」

● 正面 30センチ

■ プレゼントについて述べる。実を言うと、今回の件とは無関係に、結月はこれを用意していた。三か月前の時点で、本当はお揃いで使いたくて買ってあったので。

『子どもっぽい』と言われて過剰に怒ってしまったのも『今回のせめてものお礼って訳でもない』と言ったのはそのためである

「【ぼそっと】

……猫ちゃんのスマホケース」

〈主人公〉

「！ ……そうきたか」

● 正面 30センチ

■ 唇を尖らせ、ちよつと素直になれない感じでプレゼントについて述べる

「色は、私と同じピンクだと恥ずかしがるだろうから、黒にした。

……まあ、貴方が要らないなら私が自分で使うから、はつきり言ってくれていいわよ」

〈主人公〉

「ううん。欲しい」

● 正面 30センチ

「【とても安心した様子で。ぱあっと声が明るくなる】

あ………」

〈主人公〉

「ありがとうございます。ありがたく頂戴します。

ゆづ。よくわかったね。

私が『もし使うなら、ピンクより黒がいい』って思ってた事」

● 正面 30センチ

「【※息遣いのみ※ で表現する。

とても安心した様子で息をのむ】

………！

【途端にテンションが上がる。

喜びを隠しきれない様子で、自分の考察を述べる」

そうよね!! うん、貴方は黒がいいって言うと思っていたの。

へへ。大当たりだったわね……♡」

〈主人公〉

「うん。超大当たり。

……って事で、早速つけてみていい？

ケース壊れたから、スマホ裸のままなんだよね」

● 正面 30センチ

「明るく、とても嬉しそうに。わくわくした様子で」

うん！ 早速つけてみて。

今の貴方のスマホ、裸だものね。

■ スマホケースを差し出して

「少し真面目に、しみじみとお礼を言う」

……どうぞ。

受け取ってくれてありがとう」

〈主人公〉

「とんでもない。

……おっ。いいじゃん」

SE 4 主人公がプレゼントを受け取る音

【最初から最後まで流す】

SE 5 主人公がプレゼントを開封する音

【最初から最後まで流す】

● 正面 30センチ

■ 装着されたスマホケースを見て

「【とても嬉しそうに。ぱあっと声が明るくなる】

あ……！

うん！ びったり！

【途端にちよっと恥ずかしそうに。

ここに来て、大変な事に気づいたので。『あでもあ、でも』

……あでも、こうして持ってみると……」

〈主人公〉

「まあ、カップルアピール激しいよね」

● 正面 30センチ

「【恥ずかしさのあまり絶句して】

……うあ……！

● 正面 30〜0センチ

■ 主人公の真正面で、なぜかひそひそ声で話し始める

【※ひそひそ声※】で。

なぜか意味もなくひそひそ声になる】

やっぱりそう思う？

こうして持ってたなら、もう『私達カップルです』って主張しているようなものよね。
……どうする？ やっぱりやめとく？」

〈主人公〉

「なんでよ」

ここで、元の距離に戻る。

●正面 30センチ

「【虚をつかれて驚く。

『ええっ？ 何でそんな質問するの？』という感じで
ええ？

『なんでよ』って……」

〈主人公〉

「私達カップルなんだから、何も問題なくない？」

●正面 30センチ

「【※息遣いのみ※ で表現する。

とても嬉しそうに。ぱあっと声が明るくなる」

……！

【恥ずかしそうに、でもそれ以上に嬉しそうに】

……うん……！

【デレデレと照れながら】

そっか。もう私達、付き合ってるんだから。何も問題、なかったわね。
えへ、えへへへ……。

嬉しい……♡」

SE6 主人公のスマートフォンの着信音

【最初から最後まで流す】

【▲2まで 繰り返して流す】

〈主人公〉

「……？ 電話だ」

ふと、ここで着信がある。

主人公、画面表示を確認するが、そこにはなぜか『香椎結月』と書いてある。
もしかすると……。

主人公、息をのんで驚きつつ、結月にはそれを悟られないように努めて普通に話す。

● 正面 30センチ

■ 主人公のスマホが鳴ったので、そちらを見ながら話す

「【きょとんと不思議そうに。『一体誰かしら』という感じで】
あら、電話？」

〈主人公〉

「そうみたい。出てもいい？」

●正面 30センチ

「【『私の事なら気にしないで！ ぜひ電話に出て頂戴』という感じで】
どうぞ、出て？」

もしかしたら、ずっと繋がらなくて心配してた人からかもよ。

●正面 30センチ

■主人公の真正面で、なぜかひそひそ声で話し始める。

そして、待合スペース付近にあるコンビニを指さし『しばらくあちらにいる』と伝える
「【※ひそひそ声※】で。

コミカルに。なぜか意味もなくひそひそ声になる。

『私の事は気にしないで！』という感じで」

ゆっくり話してきて。私、そのコンビニ入ってるから」

〈主人公〉

「わかった。ありがとう」

SE7 結月の足音2

【最初から最後まで流す】

【だんだん遠ざかっていく】

【0 | 3秒ほど流して▲2】

▲2 ここでSE6がストップする

〈主人公〉

「……もしもし？」

★ボイス加工あり

・モノラルの通和風加工をする

●正面 30センチ

〈ルナ〉

「何事もなかったかのように、しれっと挨拶する。

『主人公には『私』と言えば伝わるだろう』と言わんばかりの雰囲気で」

私（わたくし）でございます」

〈主人公〉

「！」

★ボイス加工あり

・モノラルの通和風加工をする

●正面 30センチ

〈ルナ〉

「【何事もなかったかのように、しれっと先日の件をねぎらう】

先日は大変お疲れ様でした。

結月ともども、お元気そうで何よりです」

〈主人公〉

「……どうして？ 削除されたんじゃないの？

今どこにいるの。どうして話せるの？」

★ボイス加工あり

・モノラルの通和風加工をする

●正面 30センチ

ヘルナ

「柔らかに、楽しげに笑う。

本編トラック01ではまず見せなかったような、打ち解けた笑い方をする」
ふふっ。

【穏やかに落ち着いて。

ひとつ前とは一変、本編トラック01と同様の『まるでアナウンサーやナビゲーターのような、落ち着いた声音』に戻って】

順番にご質問にお答えして参りますね。

まず、ご指摘の通り、先日治療が終わった際、役目を果たした私（わたくし）は、そのまま消滅する予定でございました。

私（わたくし）は、コンピューターが結月の脳を読み取った際、治療のサポート用として生み出されたAI。

治療が済めば不要な存在だからです。

「少し間をあけてから。」

『全く理解できない。不思議な方もいるものだ』という感じで。でもどこか嬉しそうに」

しかしながら、こんな私（わたくし）の存在を惜しまれた、奇特な方がおられた。
……貴方様です」

〈主人公〉

「……」

★ボイス加工あり

・モノラルの通和風加工をする

●正面 30センチ

ヘルナ〉

「【※】ここから退場まで※ 『アナウンサーっぽさ』の中に、個人的な感情が入り始めた声になる。」

淡々としつつも、自分を探してくれた主人公を、いとおしむように話す」

あの日、仮想空間から戻られた貴方様は、結月の無事を確認すると、すぐさま私（わたくし）を探して下さいましたね。

ただ十数分（じゅうすうふん）お話しただけの、命さえない私（わたくし）の事を、随

分と気にかけて下さった。

それは貴方様が、私（わたくし）の正体を薄々勘づいての事だったので……。私（わたくし）はそのお気持ちをと、とても嬉しく頂戴しました。

そこで一言お礼の言葉をお伝えしたく、予定よりも少しだけ長くサーバー上にとどまり、この度花宮（はなみや）院長のご許可のもと、お電話差し上げたという訳です。突然おかけして申し訳ございません」

〈主人公〉

「……あの、あなたって」

★ボイス加工あり

・モノラルの通和風加工をする

●正面 30センチ

〈ルナ〉

「はい。貴方様のご想像の通りです。

【『もう当然、既知の事ですよ？』という感じで、当たり前のように、あっさりと認める】私（わたくし）は香椎結月。

■自分の正体について補足していく

正確には、香椎結月の一部……コンピューターが結月の脳をスキャンした際、彼女の『もつとも成熟した部分』と『理想とする人物像』を読み取って生まれた、疑似的な人格です。とはいっても『人格を模したA I』が正しい所ですし、それも、イメージだけで構築された、架空の存在なのですが……。

そんなものまで惜しんで下さるなんて、貴方様は本当に、結月がお好きなようですね」

〈主人公〉

「そりやそうだよ。私は、ゆづも、あなたの事も同じように大切なんだから」

★ボイス加工あり

・モノラルの通和風加工をする

●正面 30センチ

〈ルナ〉

「【複雑な面持ちで。

『嬉しいが、何だか切ない』という感じで」

……ありがとうございます」

〈主人公〉

「ねえ、こうして話せるって事は、どこかにデータが残っているんじゃないの？
だったらそれ、私のスマホにでも移植とかってできない？
今度は私のナビアプリにでもなってくれたらいいじゃない？」

★ボイス加工あり

・モノラルの通和風加工をする

●正面 30センチ

〈ルナ〉

「【楽しげだが、困ったように笑いながら話す】
ふふ。」

あらあら。嬉しい事を仰る……」

〈主人公〉

「ねえ、どう？」

★ボイス加工あり

・モノラルの通和風加工をする

●正面 30センチ

〈ルナ〉

「穏やかに淡々と、少し明るめに。

一聴して、主人公の提案に喜んで乗ろうとしているかの雰囲気で」

ええ。それは大変愉快なご提案です。

データを貴方様のスマートフォンに移植して頂き、今後は貴方様専属のナビゲートアプリとして生きる。

もしそれができたら、どんなに素敵な事でしょう。考えるだけで胸が躍ります」

〈主人公〉

「だったら……!!」

★ボイス加工あり

・モノラルの通和風加工をする

●正面 30センチ

〈ルナ〉

「優しく、でもきっぱりと」

でも、できません。

だって香椎結月は、二人も要らないでしょう？」

〈主人公〉

「……っ」

★ボイス加工あり

・モノラルの通和風加工をする

●正面 30センチ

〈ルナ〉

■タイムリミットが迫っている事に気づく

「【少し残念そうな、感嘆の『ああ』】

ああ……。

【穏やかに淡々と。もう、主人公と話せる時間は終わりが近づいていると悟って】
それに、そろそろお時間のようです。

——では、最後に一つだけ。

■自分の『本体』である結月について述べる

【結月について、少し呆れたように、でも愛情のある雰囲気で語る】

香椎結月はあの通り、何をするにも手間がかかるというか……交際相手としては、少々骨の折れる相手ではございますが。

■そんな結月と交際している、主人公について述べる

【穏やかに、主人公を勇気づけるように話す。

ルナは主人公に、結月との関係について自信を持ってほしいので】

そんな彼女を仮想空間まで迎えに行き、彼女の我がままに気が済むまで付き合って。見事お救い下さった貴方様であれば。

彼女を守り、導き、一緒に幸せになって下さると確信しております。

私（わたくしは）そんな未来の訪れを信じておりますし……その日を楽しみにしております。

……そう。例えば。

【※一呼吸おいてから※

※赤文字部分だけ、突然『結月』の声で話し始める。

結月のツンデレっぽい人格や話し方を強調した、コミカルな感じで。

現在の結月が、あたかも自分は大人っぽい女性だと自認して、ドヤっとした感じで話しているイメージで。

結月を模しているのです、一人称の読み方も『わたし』になる】

『私（わたし）のような落ち着いた大人の女性』

【しれっと『ルナ』の声に戻る。

そのギャップがコミカルで楽しく、また切ない感じで】

になった結月が姿を見せる日を、です」

〈主人公〉

「ははっ……」

★ボイス加工あり

・モノラルの通和風加工をする

●正面 30センチ

〈ルナ〉

「穏やかに小さく笑う。

先ほどまで悲しそうにしていた主人公が、笑ってくれた事が嬉しいので」
ふふふふふつ。

【穏やかに淡々と。

別れの淋しさや悲しさをまるで見せないようにしつつ、どこか切ない印象で」
……それでは、さようなら。

……どうか今後とも、もう一人の私（わたくし）をよろしくお願い致しますね。
貴方様のご協力に、心より感謝し……。

貴方様方の幸せを、いつまでもお祈りしております」

SE8 通話が切れる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「っ……っ」

SE9 結月の足音3

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてきて、正面30センチ地点で止まる】

【途中から次の『結月』のセリフと重ねて流す】

★ボイス加工あり

・だんだん近づいてくる

●正面 30センチ

「【見何事もなかったかのように明るく】

あ！ 終わった？

■主人公の今にも泣き出しそうな表情を見て、とたんにおろおろする。

『先ほどから何やら深刻そうな様子だったけど、やっぱりそうだったみたい!』という
感じで

【おろおろと心配そうに】

大丈夫?　なんか大事な話だったんじゃない?」

〈主人公〉

「ん?　そう見えた?」

● 正面　30センチ

「『当たり前でしょう!』という感じで肯定する」

そう見えたわよ。

だって貴方、遠くから見てもわかる位(くらい)、泣きそうな顔して話してたし。

【特にとても心配そうに】

……ねえ、ほんとに大丈夫だったの?」

〈主人公〉

「うん……何て言うかね?」

● 正面 30センチ

「真剣に続きを促す」

うん」

〈主人公〉

「未来のゆづと、話してきたみたいなの……？」

● 正面 30センチ

「ぎよつとして驚く。」

主人公が急にコミカルな言い方をしてきたので、完全につられる」

ええっ!! み、未来のわたしが電話してきた……!!

『あわわ、どうしましょう!!』という感じで、途端におろおろし出す。

ちよつと早口気味に、コミカルに。

矢継ぎ早に自分の意見を述べる」

そのスマホどうなってるの？

それ、絶対バグか心霊現象よ。怖すぎるわ。

やっぱり病院で直すのは駄目ね。

きつと何かおかしなものが入り込んだんだわ。

……どうしましょう。今すぐ直してもらいに行く？」

〈主人公〉

「あはは、それはいいよ」

●正面 30センチ

「【きよとんとして】

……いいの？」

〈主人公〉

「……直さなかったら、いつかまたかけてくれるかもしれないからね」

●正面 30センチ

「『よくわからない、腑に落ちない』という感じで」

ふーん……？」

〈主人公〉

「それより、さ。急がないと。そろそろ行かないと、プラネタリウム始まっちゃうよ」

●正面 30〜0センチ

「【※ぐいっと引き寄せられるように近づく。主人公に腕を引かれ、耳元にささやかれたので。」

ぱあっと嬉しそうに。

AIの件や泣き出しそうな主人公の事が心配ですっかり忘れていたが、今日はこれからデートなので。自分たちは昨日行けなかった科学館デートを、ついに実現するので」

あ……♡

【途端にうきうきと上機嫌で】

そうだ。そうだったわね♪

……そろそろ行かないと、プラネタリウム始まっちゃうわ！

……じゃあ。

●正面 0センチ〜左 0センチ ささやき

【※赤字部分をささやく。

ひそひそと、嬉しそうに】

手とか繋いじゃったり、する？」

〈主人公〉

「当然」

● 左 0センチ→正面 15センチ

■ 少し離れて、主人公を正面から見つめながら微笑む。

「【今までで一番幸せそうに笑う】

ふふふっ……♡

【とても嬉しそうに、明るく提案する】

では……行きましょうか！」

SE10 結月と主人公の足音

【最初から最後まで流す】

【少しだけずらして重ねて流して、二人分の足音のようにする】

ここでフェードアウトして終了。